

消防ヒヤリハットデータベース事例回答シート

【事故概要について】

1. 事故・ヒヤリハットの別	事故
2. 体験した事例の名称	建物火災時における消火活動中での熱傷事案
3. 体験した事例の中心的要素	・防火衣に対する過信 ・現場活動中における感情の昂ぶりによる冷静な状況判断の欠如
4. 体験した事例の原因・理由	・輻射熱を軽視していた ・夏場ということもあり、防火衣の下に活動服を着用していなかった（署支給のTシャツのみ）

【体験した事例の直接的原因について】

1. 体験した事例の直接的な原因	行動の意志決定に問題があった。（大丈夫だろうと思った。）
------------------	------------------------------

【体験した事例について】

1. 発生日時	平成27年8月7日 午後5時頃
2. 発生した当時の天候	晴れ
3. 発生した活動現場	屋外：延焼中の建物周辺
4. 体験した事例の種類	回答者が、自分自身で負傷した。
5. 事故の程度（ヒヤリハットの場合、仮に負傷したときの程度）	軽傷の怪我
6. どのようなことが起きたのか（起きそうになったのか）	火傷・熱傷
7. 事例体験時の活動	火災現場活動中期、〔木造建物〕
8. （7の活動中）どのような作業中に発生したか	放水活動
9. 同様の体験は、これまでにどの程度の頻度で体験していますか。	初めて体験した

c. 経験・知識が不足していた。

・活動内容が、自己の能力や技量を超えていた。	いいえ
・活動中に起こりうる危険について認知していなかった。	はい
・活動に対する経験が不足していた。	いいえ

d. 心身の不調があった。

・体調が悪かった。	いいえ
・悩み事があった。	いいえ

○装備・資機材について

e. 資機材の故障・不具合があった。

・装備・資機材自体に問題があった。	いいえ
・装備・資機材の使用 방법이誤っていた。	いいえ
・装備・資機材の対処能力を超えていた。	いいえ
・必要とする装備・資機材がなかった。	いいえ

○活動環境について

f. 障害物や自然環境(雨・濃煙)によって視界がさえぎられた。

・障害物(建物等)のため周囲の状況が見えなかった。	いいえ
・特異環境(煙、暗闇、降雨等)のため周囲の状況が見えなかった。	いいえ

g. 行動しにくい環境だった。

・狭隘な場所であった。	いいえ
・暑かった(寒かった)。	はい
・野次馬が多かった。	いいえ
・現場周辺の地理に不案内だった。	いいえ

h. 足場が悪かった。

・足元が躓いたり滑りやすかった。	いいえ
・足元の強度が不足していた。	いいえ

○指揮・管理について

i. 適切な指示が得られなかった(適切な指示を与えられなかった)。

・活動指示が得られなかった。(無線が通じない等。)	いいえ
・指示内容に誤り・偏りがあった。	いいえ
・指示内容が実施困難であった。(周辺環境に、隊員技量の把握に欠けた。)	いいえ

k. 関係者間の情報伝達・役割分担が不十分だった。

・隊員の連携が不十分だった。	いいえ
・隊員が不足していた。	いいえ

○その他

l. その他の理由があった。

消火活動中も気持ちか昂ふっていたのか特に痛みも感じず、大丈夫だと思っていた。休憩時に受傷に気づき、気も緩んだのかその瞬間からピリピリと痛みを激しく感じた。

【事故発生後の取り組みについて】



○注意力欠如、焦り等の対策について

誰もが火炎を見ると緊張してしまうと思うので、そこで一息つける余裕を持つようにする。自分自身や隊員の置かれた状況を客観的に判断するため、小隊長自らが筒先を持ち消火活動に従事しないように努力する。

○装備・資機材の対策について

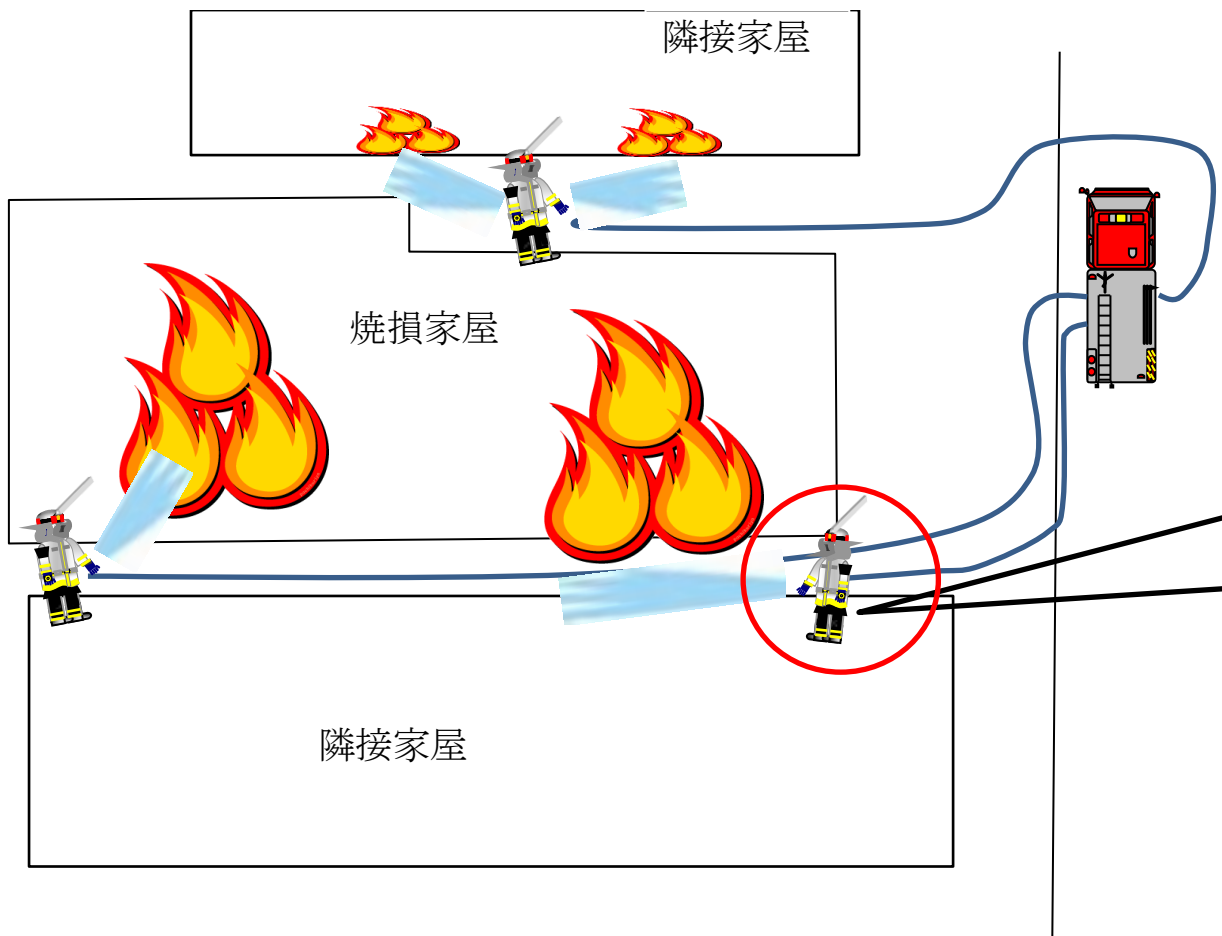
防火衣はもちろんだが、安全装備の着装を徹底する。今回防火衣の下に活動服を着用していれば胸部と脇部の爛れは防げたと思われる。手指についてはケブラー手袋を着装して活動していたが、水泡が出来る等の熱傷を負ったため、適宜水で濡らす等自身を冷却する事も考慮して放水活動を行うよう徹底する。

○活動環境の対策について

隣家への延焼拡大を防ぐため長時間の消火活動を余儀なくされたが、体力の消耗等も考慮し早期の交代要員の確保及び前線で放水する隊員への援護注水を実施することを念頭に、夏場の火災現場活動に従事する。また火炎だけでなく風下に部署することにより熱風による熱傷を負う危険性を考慮する。

○指揮・情報伝達の対策について

火災状況を考慮し、早期の交代要員を確保しておく。配置した職員の活動時間を客観的に判断し、適宜休憩や配置転換を行う。



現場到着したところ既に焼損家屋の火災は最盛期を迎えており、南側に隣接する建物に類焼する寸前であったため、先着小隊長として隊員に延焼拡大防止を主とした消火体制を隊員に取らせたのち、自らも筒先を保持し火点直近で延焼防止のための消火活動を約1時間程